あさ 1

2016

井の頭公園池浚

蘇民將來(埼玉県高麗神社)
版画　武井石艸

鬼怒沼

沼が近し赤く励ますペンキの文字　　堀内一郎
沼の唇霧来てそよぐ食虫花

好摩乗換霧をうたひて啄木立つ　　佐藤喜孝
翁の歩調にのぼらん若葉の月見坂

(昭和 39 年水音)

あさ

一　月

正月

佐藤喜孝

元日や三和土を抜けて裏の藪
家根に置く石初春の影の濃く
石塊にかんばせふたつ佛の座
朝酒の抜けきしところ初雀
初景色昔硝子のゆらゆらと

烏瓜

森理和

蜘蛛の巣に蜘蛛逆さまに秋日和
晩秋や音の無い夜の空気圧
穭田の広々つづき相模川
一粒の取れなくもない烏瓜
山並や崩れはじめし藁ぼっち

椿冬芽細き螺旋の天を指す

豚汁にきりりと泳ぐ大根の葉

金色の蕊の山なすお茶の花

冬萌や石階少し温りて

うら若き妻の横顔冬ともし

須賀忠男 人物展

秋の蚊

赤座典子

風も日も

秋川　泉

澄み渡る風の中にも神無月

黄落の舞狂ほしく降り積もる

日向ぼこ合掌する身温もれり

万灯会賑やか稚児もまじりゐて

旅終へし膝痛むなり寒の月

床に響く硬貨一枚西鶴忌
連れ合うて軒の雀や一茶の忌
鏡中の汝励まさむ神無月
知らぬ世へ招く雪吊並木かな
頂上に坐す地蔵尊冬帽子

☆

動石上井

三味の音

大日向幸江

調律のピアノポロロン冬菫
三味の音を好む人居り冬座敷
賀状書く青いインクで書きあげる
嬰の手のパッと開いた紅葉かな
秋鮭のソテーに振りし赤ワイン

猫にもすなる避妊手術や神無月

手逆立て震へる猫や待合室

目丸くしてしがみつく猫診察台

猫預け長き一日花八手

術後の猫そつとそと抱く小春の日

マサムネ避妊手術

斉藤裕子

猫

佐藤恭子

天道ぼこり猫のころがるアスファルト

土器を押し頂くように新走り

川曲に銀杏もみぢの速流れ

蒲公英の苔石垣から食み出

タンポポの飛英追ひかけ奥つ城へ

秋の蚊の童にとまり叩かれず
芒原平和を願ひざわわざわ
一人行く雑木紅葉のしゃりちゃりしゃ
山奥のチェンソーの音秋仕舞
大理石床暖房のモスクかな

音

七郎衛門吉保

雀の数

篠田純子

北風や軒の雀の二羽足らぬ
校門をくぐれ無いから花柊
門付の瞽女の三味線だんべだべ
大尺寸的男装クリスマス
森村誠一の瞳暖か雨のデモ

のら犬の秋愁今も首輪して

榠樝このでこぼこ年寄ってはをれぬ

驚くや金魚の火色朝寒み

身に入めり嗽ひはあふがねばならず

一匹づつ冬日の亀の確かな個

確かな個

定梶じょう

無心

須賀敏子

毛糸玉一個編み切る無心の夜

貴船菊しっかり咲いて散りにけり

秋澄めり夜叉神峠あっ北岳

亡き父はコスモスが好きと姉に聞き

どちらかと言へば熟柿の方が好き

鱧なます夫には夫の旅ごころ
泳ぎ子にさいかちの枝伸びきりし
鱧椀の冷やしたるよし茶懐石
秋の風陳列棚に石包丁
秋立つと天帝隕石飛ばしけり

旅ごころ

竹内弘子

鉄平石しぐれに濡るる傳茶房
観音の体内は寺秋の雲
ころがりし消しゴムも持つ冬の影
をととひはすでに遠き日葱洗ふ
調理器具少なく浄く冬厨

冬厨

田中藤穂

邪魔な葉を剪れば飛び立つ秋の蝶

友逝きて身に入むばかり三日過ぐ

秋晴や俄な強風低気圧

大花野守る術なし低気圧

落葉積む堪へて育つか微生物

落葉

長崎桂子

十二月作品より

斉藤裕子・佐藤喜孝

月もやや歩をゆるめたるところなり　佐藤喜孝

十五夜の夜、綺麗な月が昇ってくるのを心待ちにして、何度も空を見上げる。住んでいる場所にもよるのでしょうが、東京の街の中では建物に遮られて、あまり早い時間では月も高い位置にまで昇っていなくてよく見えない。月が丁度上に来た時に見られたらいいが、遅すぎるとこれまた見えなくなってしまう。ずーっと月の出を眺めていられる時間と場所に恵まれれば良いのでしょうが、なかなか難しいものです。しかし月も一番高い所まで昇ると、暫くはその高さのままで移動していくように思えます。作者がご覧になった時は、丁度月も昇りきってよくみえる時だったのでしょう。「やや歩をゆるめたるところ」という表現で、ゆったりした気持ちで月を見上げる作者と、月の気持ちが一緒になったような時間が流れていくようです。

余談になりますが、小学生の頃、従姉妹と十五夜の夜、校区の綱引きを見に行き、遮るもののない山の上に出た月と競争をして歩いた事を思い出しました。ゆっくり歩くと月もゆっくり、早く歩くと月も早くついてくる、止まると月も止まる。この句と同じ情景ではないのですが、この句で甦って来た懐かしく楽しい思い出です。（裕子）

薩摩芋根を出す方と葉を出す方　森理和

句会に行くと、理和さんのお店の敷地に植えられた、色んな植物が目を楽しませてくれます。

お店の中にもその季節のものが飾られていて、理和さんが暮らしを楽しんでいるのが感じられます。お手洗いの中にも楽しい植物が活けてあり暫く見入ってしまいます。この句も、そんな理和さんならではの句だと思います。きっと薩摩芋を水盤に入れて、葉の出るのを観賞している。根を出す方と、葉を出す方、どんなふうになっているのか、私も薩摩芋をこんなふうにして観察してみたくなりました。理和さんの子供のような目と好奇心の感じられる句だと思いました。（裕子）

薩摩芋根を出す方と葉を出す方　　森　理和

植物の命の不思議に驚き体感してゐる作者。当り前と思ってゐたことにあらためて感動してゐる素直な感性は素晴しい。単純にみえる表現だが、内容のある作品。（喜孝）

ひと知れず祈りの行者九月尽　　秋川　泉

お尋ねした事はないのですが、泉さんはお寺の奥様なのかなと思います。いつも檀家さんを見守る温かい目を感じる句が多いように思います。仏道の修行をする人は、きっと孤独な己との闘いの日々を送られているのだと思います。ひとり黙々修行を積む行者の姿が、「ひと知れず祈りの」というフレーズによく表されており、それを陰から見守り応援している優しい泉さんの目を感じました。（裕子）

蚯蚓鳴き禁じ手つかひ法案成す　　秋川　泉

掲句、昨今の政情を嘆かれての一句。民主主義の弊害ともいへる数の横暴は今に始ったことではない。。生々しい時局俳句に「蚯蚓鳴き」の季語が生きてゐる。〝鳴き〟は〝鳴く〟の方

が落着くか。蚯蚓の声は声なき声である。（喜孝）

しのび入る木犀の香や部屋ゆふべ　井上石動

木犀の香がどこからともなくしてきた。静かな夕刻の部屋のやうすである。全てが満たされた作品。ここは〝部屋〟までと言及するのを控えるのも一法。省くことにより香りの忍び入り先は、作者の居る空間でもあり、そして作者自身ともなる。（喜孝）

愛を断つ縁切寺や鰯雲　大日向幸江

「愛を断つ」とは何とも強烈な表現。ただ縁を切るというより、そこに至ったそれまでの出来事や、感情の変化をも深く表しているようで、縁切寺に駆け込む女性の哀しさ、辛さが伝わってくるようです。そんな縁切寺の上空に、鰯雲が広がっている。青い空に浮かぶ鰯雲が美しいだけに、スケールの大きい自然界の事象と人間界の出来事の対比を余計に際立たせているように感じました。（裕子）

登り来し道は何処に山紅葉　大日向幸江

俯瞰した山の紅葉の美事さをこのやうに表現できるとは。「これはこれはとばかり花の吉野山　貞室」は呟きの俳句。掲句は呟く対象を詠んだ俳句。（喜孝）

おほぞらに風がをきゆく鰯雲　佐藤恭子

こちらは鰯雲そのものを詠んだ句。同じ鰯雲でも、とても開放感あふれる句だと思います。この雲は、雲の下の気温が高くて雲の下の気温が低いときに、対流が起ることによって発生するそうです。まさにあの大空一面に広がった鰯雲の雄大な景色は、風が成せる技なのですね。

「風がをきゆく」という表現に、自然の力の偉大さに心打たれながらも、親しみを持って眺めている作者の気持ちが込められていると思いました。（裕子）

癌だとて生きるは楽し曼珠沙華　斉藤裕子

何の予兆もなく突然地面から首をだし、茎をつゝゝと伸したかと思ふと嘴のやうな莟から赤い花を咲かせる曼珠沙華。人生も五七五、限りあるがゆゑに一日一日を味わい尽す。元気を頂く一句。どの花もさうだが特に曼珠沙華のやうに咲く気概を感じる花は少ない。（喜孝）

月明かり赤児のまなこ黒水晶　七郎衛門吉保

赤ちゃんのまなこは本当に濁りなく澄んでいて、吸い込まれそうに美しい。まなこに映る月明かりが、赤ちゃんのまなこを一層くっきりとうかびあがらせ、極上の黒水晶を覗き込んでいるよう。頷ける句です。句会でご一緒する吉保さんは、いつもテーマを持って果敢に句作なさっていて、その意欲ある姿勢にいつも頭が下がります。（裕子）

焦螟にニュートリノの重さかな　篠田純子

焦螟という季語を、純子さんのこの句で初めて知りました。自分の不勉強と無知に恥じ入っております。夏の季語で、「蚊の睫毛に巣を作るという想像上の小虫。転じて、微小なもののたとえ。」とありました。今年の明るいニュース、ノーベル物理学賞受賞の梶田さん。今まで質量はないと考えられていたニュートリノに質量があるという。スーパーカミオカンデでの気の遠くなるような地道で緻密な実験と研究。その重さは想像もできないほど超微小で、まさにこの

「焦螟」という季語はニュートリノを予測して作られたのではないかと思う程です。想像上の事が真実になってしまった。ニュートリノの句に「焦螟」というぴったりの季語をもってくる純子さん、流石だと感服いたしました。（裕子）

焦螟にニュートリノの重さかな　篠田純子

懐かしいなあと思った季語。歳時記を開けば分ることだが列子に出づ、とあるからかなり古い。意味は裕子さんが書かれてゐる。枕草紙にも出てくるから面白い。実在しないこの虫を蚊に巣くふことから夏の季のことばにした古人も面白い。懐かしいと書いたのはわたしも昔この季語を知り何とか一句をと作ったのが〈蟭螟にアリバイのなしこれからも〉といふ埒もない代物。例句も少ない。

蟭螟も似合にやどせる蚊の睫　古俳句

蟭螟の目には見えぬや人の顔　靄人

眼をねむつて蟭螟を見る學者かな　虚子

焦螟のその睫毛にもさらに虫　辻田克己

焦螟や欠伸上手の新生児　小川文子

焦螟とニュートリノとの発見には二五〇〇年ほどの間がある。（喜孝）

一つ乞ひどさりともらふ隼人瓜　田中藤穂

沢山生っている隼人瓜に出合った藤穂さん。珍しい、あるいは懐かしい気持ちになって、一つ貰えないかと尋ねてみた。親切な持ち主さんは、快く沢山の隼人瓜をコンビニの袋にでも入れて持たせて下さったのでしょう。一人暮らしの藤穂さん。「一つ乞ひどさりともらふ」で、ちょっと困った気持ちが、良ーく伝わってきて面白いと思いました。「どさりと」に、気前よくくれた感じと、重たそうな感じも良く出てい

ると思います。下さった方の善意をありがたく感じて、断りきれずに持ち帰る藤穂さんが浮かんで来て微笑ましくなりました。さぞ、重たかったことでしょう。（裕子）

山合の一字覆ふ赤とんぼ　　田中藤穂

大字小字といふと勝手に自然豊かな風景画浮んでくる。昭和四十年ごろ埼玉の鳩ヶ谷市に一時住んでゐたことがある。其処は大字里字諏訪といふ住居表示。見沼用水のほとりで休日にはタナゴ釣をたのしんだ。濁り鮒にもおどかされた。掲句、赤とんぼの数の多さを〝一字〟を覆ひ尽すほどとはスケールの大きいことだ。（喜孝）

あをキーワード俳句辞典（こおーこき）

小面
小面の愁ひ秘めたる夜半の月　森山のりこ
小面の目の奥に見る春の闇　芝　尚子
小面のアンシンメトリー秋の宵　篠田　純子
壁に在る小面うごく淑気かな　田中　藤穂

郡山
楤の芽や遠くなりたる郡山　芝　尚子

小買物
甘酒や明治座帰りの小買物　河合　笑子

小陰
地虫鳴く庭に小陰のしめりかな　堀内　一郎

古稀
妹も古稀を過ぎたる芒道　東　亜未
頑健と思いし長兄古希大寒　佐藤　恭子
米寿喜寿古稀とそろひし彼岸道　鎌倉喜久恵
古希にして雛を購ひはにかめり

野水仙そのままに挿し古稀祝ふ　森　理和
青葉光岩手への旅夫は古稀　赤座　典子
鈴蘭の咲いてめでたく古稀の人　須賀　敏子

濃き色

みそはぎの濃き色に出し屋敷畑　竹内　弘子
濃き色のまたぎの里の文字摺草　須賀　敏子

小刻み

踊子の傾げる鼻緒小刻みに　赤座　典子
小刻みの翅を動かす黒揚羽　森　理和

小気味

風鈴市風小気味良く通り抜け　木村茂登子
風花やミルトジャクソン小気味良し　赤座　典子

呼吸

あたたかし呼吸器の管引いてゆく　竹内　弘子
呼吸する臓器のごとし春海月　篠田　純子
初秋や薩摩ガラスにひと呼吸　吉弘　恭子
人工呼吸ビルのはざまに夏の雲　堀内　一郎
胸式と腹式呼吸風薫る　長崎　桂子

青々と呼吸するなり青田風　早崎　泰江
新涼やヨーガで深く呼吸する　須賀　敏子
地の呼吸一心不乱に冬鴉　佐藤　恭子

胡弓

胡弓の音月蝕の赤青簾　東　亜未
濃紫陽花胡弓に怺へしもの溢れ　篠田　純子
梅の花胡弓に踊りだす子供　早崎　泰江
はるかより胡弓の音色風の盆　田中　藤穂
蝶の昼聞こえて胡弓揺々たり　定梶じょう

故郷

他郷をば故郷と見なし春時雨　王　岩
萬歳を生業とせし故郷あり　鎌倉喜久恵
妹や生れ故郷は青時雨　須賀　敏子
対岸に故郷見てをり猫柳　東　亜未
饅飩のカボチャなじみて故郷の味　芝宮須磨子
白砂青松故郷排気ガスに秋思　長崎　桂子
ゴールデンウイーク故郷とはハーモニカ　堀内　一郎
檸檬切る智恵子の故郷思ひ馳せ　長崎　桂子

前月抄

金魚鉢の水かきわけて八月　佐藤喜孝

青あをと草育ちゐて昼の虫　長崎桂子

薩摩芋根を出す方と葉を出す方　森　理和

突抜けるカノンの調べ秋の暮　赤座典子

蚯蚓鳴き禁じ手つかひ法案成す　秋川　泉

しのび入る木犀の香や部屋ゆふべ　井上石動

登り来し道は何処に山紅葉　大日向幸江

癌だとて生きるは楽し曼珠沙華　斉藤裕子

おほぞらに風がをきゆく鰯雲　佐藤恭子

椿の実弾けて飛んで豹柄に　七郎衛門吉保

焦螟にニュートリノの重さかな　篠田純子

秋交る猫と洗濯日和かな　定梶じょう

老犬が老人を曳く秋麗　須賀敏子

稲架組むや郵便船が近づき来　竹内弘子

山合の一字覆ふ赤とんぼ　田中藤穂

喜孝　抄

比来披見

ホトトギス　十二月号

さつきまで雨止んでゐし冬の朝　稲畑　汀子
食後酒は炉端でどうぞ山の宿　稲畑廣太郎

春燈　十二月号

酔芙蓉夕日の朱ヶを誘へり　安立　公彦
蹇に遠き家路や暮早し　小渕二美江

沖　十二月号

秋灯のくらがり作る酒肆の路地　能村　研三

馬酔木　十二月号

ちちははの肩触れ合うて菊日和　徳田千鶴子

空　63号

簟てふ大筒を展くかな　原　友子

鴫　十二月号

月の夜は都大路に立つごとし　井上　信子
色濃かるらむ辺境の秋桜　高橋　道子

万象　十二月号

漆黒の輪島の筒の韮の花　大坪　景章

雲の峰　十二月号

もみいづる遅速も桜並木かな　朝妻　力

朝　十一月号

雨脚のためらひもなし破芭蕉　岡本　眸

峰　十二月号

草臥ぶれるほどに眩しき大霜野　布川　直幸

風土　十二月号

寝たきりの我に蝶来てとんぼ来て　神蔵　器

雨月　十二月号

萩の寺なれ萩咲いて萩の句碑　大橋　晄

瓔　15 - 4

芒原いま宇宙船通過中　火箱　ひろ

雲の峰　一月号

キャリーバック引きて日暮るる翁の日　朝妻　力

ホトトギス　一月号

病む友の消息二三初句会　稲畑　汀子
賀状来て昨日を遠くしてをりぬ　稲畑廣太郎

こだま　十二月号

三半規管といふでで虫や虎落笛　松林　尚志

朝　十二月号

泛び来し鳰の険しき面窶れ　岡本　眸
冬は楽し切株に子ら杭に鴨

俳句通信　89号

金属音が君らの眼ばたき夏が来る　金子　兜太
朝だけ鳴いて里の鴉の被爆せり

比来披見

人呼べば声がきらきら大花野　富田　正和

槐　十二月号

人をらぬ平和な宇宙原爆忌　高橋　将夫

京鹿子　十二月号

ひとことにふた言み言そぞろ寒　鈴鹿　呂仁

末黒野　十二月号

山の音瀬の音秋を深めけり　松本三千夫

六花　十二月号

印南に八十九池鴨渡る　山田　六甲

萱　一月号

秋風の吹きはらはれし野となんぬ　木村　嘉男

長病みの雨の日風の日文化の日　亀田虎童子

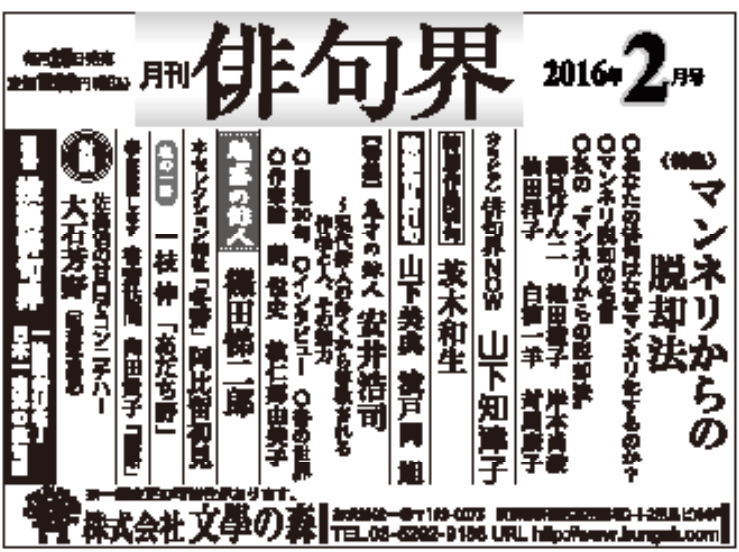
在らぬ処にまなこの遊ぶ美術展　松下　道臣

砂時計の三分早し冬に入る　小島　良子

澪　一月号

枯蟷螂見上ぐはブルーインパルス　松林　尚志

佐藤喜孝抄



俳境流連

ウインドーの赤革手帳買ふことに　幸　江

この時季、来る年の為に手帳を買う。気に入りの手帳を手に入れる事は、私には宝くじの当りを手に入れるのと同様の思いだ。あの有名な雑貨屋さんのウインドーにそれはあった。「ピン」と私のハートが鳴った。こんなに可愛い色をした手帳は初めてだ。決まりこれを買おう！

私から見れば高い買い物だ。少し早いけど、自分のお年玉だよ、ルンルンの気分で家に帰る。早速来年の予定を書き込む？しかしどこか変だ、今使用している手帳と違う。一番大事なスケジュール表が小いさく書き込みづらい。私は赤皮に気を取られ中身を見なかった。失敗だよ、高い清水の舞台から飛び落ちたよ。

この年の暮にね。

淑気かなジョージ・チャキリスの靴の先　純　子

子供の頃、テアトル東京でシネラマを見た。ナイヤガラの滝が映し出されていたが、どこを見ていいのか落ち着かなかった。

その映画館の近所に住むとは思わなかった。引っ越してきた頃には、かつてシネラマを見た映画館は、ホテル西洋になっていてその中に、ル　テアトル銀座となっていた。

ある年に、ル　テアトル銀座に、ウエストサイド物語が、かかった。年の暮れに等身大と思われるジョージチャキリスが、映画館の前に！脚をぴんと上げた例の姿の像が出現してびっくりした。デジタル　リマスターバージョンとかでフィルムがクリアになったらしい。この映画はパスしたが、このチャキリスの像の前を通るたび、溜め息をついた。

この後、やはりフィルムがクリアになったジェラール　フィリップの「赤と黒」を観たが、以前に観たより画像は鮮明だった。

今、ホテル西洋は完全に取り壊された。ルテアトル銀座も無い。

手を合わす刻長くなり寒椿　　裕子

仏壇の花の水を変え、お供えのご飯とお茶お水をあげ、手を合わせるのが毎朝の日課。この句を詠んだ頃は、色々心配事を抱えていたのだと思います。「おはようございます。」に続けて、いつも沢山の願い事ばかりを心の中で唱えていました。願いが叶うと報告とお礼の言葉も唱えます。手を合わせる時間も長くなり、忙しい気持ちになる事もしばしばでした。

自分が癌になった時から、私の毎朝のお参りは変わってきました。お願いするだけのお参りを止めたのです。お願いするのは「今日一日が良い一日でありますように。」それだけ。後に続けるのは「自分の目標に向かって挫ける事なく進んで行きます。困難を乗り越え頑張って行きます。どうぞ見守っていて下さい。宜しくお願いします。皆様、お安らかに。」と。自分の意志を伝えるようにしたのです。癌の手術をしてから丸三年、転移再発して癌剤治療を続ける現在、不安で打ちひしがれそうになる事も度々ですが、以前より手短かになった言葉を唱えながら、自分を励ますように手を合わせ、一日を始めるようにしている毎日です。癌だとは言え、生きていられる事は楽しい。心からそう思います。

冬草に横坐りせる茶虎猫　　幸江

その猫は本当にゆったりと私の領分に入ってき

た。冬至の陽の中に眼を細め一点のくもりも無いガラス窓の中に居る私を繁しげと見ている。やがて猫は、もっとも陽の良く当る犬ふぐりの上にまるで一服するように背中を押しあて、ごろごろと転がり始めた。気が済んだのだろうか、のっそりと、その場所を去って行った。

私は子供の頃から犬、猫と絶える事なく暮らしてきた。私や子供達も温和しく親分風の茶虎猫が好きだ。最近の私は、ハーフの黒白猫と暮している。気が強く私と猫は睨み合う。黒白猫の大好物を犬ふぐりの上に置いて来た、「また御出でね。」

漁火寒しつひの住処のともるごと　じょう

この漁火は烏賊釣火のことです。現代集魚灯は烏賊漁での使用が殆んどでしょうが、季語に「鯖火」なんてのがありますし、昭和三〇年代初めくらい迄はさざえ漁にアセチレン・ランプを使ったものでした。その集魚灯、普通は一本四〇〇ワットの容量のものを、小型船でも十本以上を使います。近頃はＬＦＤランプを使用する船がふえて、電力量は減って光度は上がる、という夢のようなランプもでてきたのでした。そんな烏賊釣船は陸地から眺めても、色の青さ・明るさですぐ区別できますし、比較的大型ですから魚群が沿岸を離れると陸からは見えなくなる。十一月以降は地元の小型漁船が、容量の小さな発電機で赤っぽい灯しをこころ細げに点して、凪ぐ日だけ出漁するのです。百噸はありそうな烏賊船は、相当な波浪をものともせず出漁しますが、小さな漁港の小さな漁船はついそこに自分の船溜りがあったとしても、怯えた小羊のようにびくびくと風向きを確かめながら釣りに励むのです。

すはれゆく夕焼空へ鴉かな　　恭　子

何となく鴉が好きだ、と言うか気になる生き物である。ゴミを漁っている姿、嘴で仲間とつつきあっている時、また木の上で何を見ているのかわからないが凝視しているところ等ついつい振り返りながら通り過ぎる時が多い。

頭がいいのか記憶力が優れているのか、覚えている。ゴミ置場を散らかしていたことがあった。つい追い払ってしまった。それからどれくらい経ったかは記憶が定かではなくなった頃、喜孝と一緒に出掛けることがあった。家を出てすぐ頭上に鴉がいることは分かっていた。

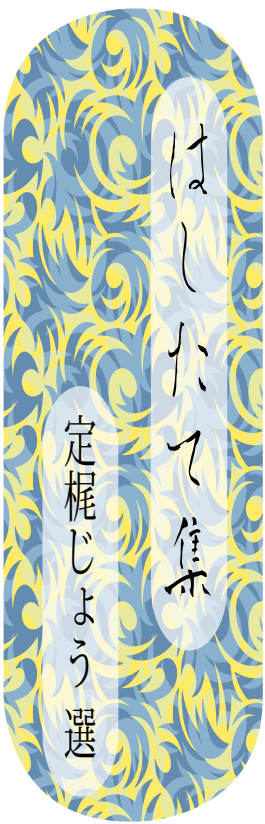
が、まさか襲ってくるとは頭の片隅にもはいってなかった。突如上から帽子をつついて電柱に止まった。また降下してきた。私ではなく追い払った喜孝めがけてだった。あっあの時のお返しだなと、分かった。そんなことがあってから鴉が気になった。鴉の群れが夕方北のほうに翔んで行くとき代々木公園のねぐらに帰るのかなあ～と。この寒空に塒はあたたかいのかなあー。

草花に寄ればつと飛ぶ秋の蝶　　桂　子

朝夕に涼しさを感じる頃になると、昼間に飛んでいる蝶蝶も少々ゆっくり飛んでいるように、私は感じます。

買い物の往き帰りや、庭に来てくれた蝶が草木に止まっているもで、ふと幼い頃のように捕まえようと忍び足で近寄りますが、とんでもなくて、急に飛び立ちます。

私は自分の運動機能の衰えを思い知らされます。と同時に、蝶の飛び立ち逃げる其の速さに驚きます。そして「つと飛ぶ」の言葉を当てました。



須賀敏子

忙しく小啄木鳥幹打つ下山道
荒海を明るく見せて石蕗の花
高き背負けじと皇帝ダリア咲く
綿虫や空爆の報続きけり

忙しく小啄木鳥幹打つ下山道

省略できるものは省略すべき、とするのが句歌の基本。ですからきつつきに、「幹」打つは、きつつきが打つ、でいいわけです。

〈忙しく小啄木鳥打ちけり下山道〉

高き背負けじと皇帝ダリア咲く

「咲く」も省略すべき、とするセンセイが大勢いて、私の友人が句会でそう注意したら、俳句を作れない、と陰ぐちを叩かれた、といいます。「花が咲く」「鶯が鳴く」と言ってどこが悪い、ということでしょうか。

そして「負けじ」は、ダリア同士が高さを競うているわけでしょうからもう少し丁寧に

〈高き背たがひに負けじダリア咲き〉

皇帝を言いたかったのかもしれませんが。

綿虫や空爆の報続きけり

「や〜かな」「や〜けり」を嫌うセンセイがやっぱりあって、私なぞ「お題目」に過ぎぬ、と思うのですが、直せるものは直したほうがいい。

〈雪蛍空爆の報続きけり〉

赤座典子

冬晴や軽く響けるものの音

伏せられて片隅に濡る陶火鉢

小さきにも手締盛大熊手かな

初暖炉もてなす主紅の濃く

冬晴や軽く響けるものの音

気温が低いほど空気の密度は高いんだそうです。だからもの音もよく響く。具体的にものの名を言わなかった処に余韻。

井上石動

超満月寄する叢雲おあつらへ
ギオロンも貯蓄も無しも秋日和
放ちたる一矢秋の気裂きにけり
愉しげにもみづりにけり裏の山

超満月寄する叢雲おあつらへ

先に、典子さんの句で「古往今来スーパームーン……」がありましたが、「超満月」は典子さんの「スーパームーン」でしょうか。外国語のできる石動さんはそのまま英語を遣うことにあるいは照れがあったのかも。で、訳して「超満月」とした。そして「おあつらへ」は、本来マ

イナス・イメージで使うはずの「月に叢雲」を、いやいや丁度いい具合にかかってくれた、と。

ギオロンも貯蓄も無しも秋日和

中七「貯蓄も無しも」は苦しい。〈貯蓄なしギオロンもなし秋日和〉。

愉しげにもみづりにけり裏の山

私なら、「もみづりにたり」と。「にけり」より強く響くことで単純さをほんのちょっぴりくつがえす。

木枯や遺伝子細胞活発化　佐藤恭子
背のびしで五尺一寸秋燈
ぬすみ食ひ舌に重なる柿の渋
鬼子母神ためらふ銀杏ひろひかな

背のびしで五尺一寸秋燈

恭子さん御自身のことでしょうか。筆法ののびやかさから私、何となく背丈の高いかたか、と想像していたのですが。

長崎桂子

今朝の窓絵画めきたり櫨紅葉
鰯雲夕暮に夫懐かしむ
野分過ぐ田圃啄む雀たち
秋日差し背に受け明日の備へ考

鰯雲夕暮に夫懐かしむ

ひとの内情にたち入ること慎まなければなりませんが、ともかく「夫」をなつかしむ、ということなら、〈鰯雲夕暮は夫懐かしむ〉と、強調してもいいと思います。

山荘慶子

ラジオ体操秋一日はじまれり
秋扇待合室にはためかす
草の実や色をつくして瑠璃色に
病む犬の眼うつろや初時雨

秋扇待合室にはためかす

動作を言うよりも秋扇そのちのに焦点を当てたい。〈はためかす待合室の秋扇〉。

草の実や色をつくして瑠璃色に

「色をつくす」がうまい。「瑠璃色」なのです。

森理和

爽やかに草のなびきは僅かなり
柿撓わかかりっぱなしの梯子かな
滑り台だけの公園薄紅葉
携帯に誕生の顔七五三

柿撓わかかりっぱなしの梯子かな

やっぱり定型にしたい。

〈柿撓わかけっぱなしの梯子かな〉

篠田純子

行く道は下流老人新ばしり
〇(まる)9でゴミ袋もらふハローウイン
まじまじと防犯カメラ木の葉髪
ときわ食堂いっとう旨き鯵フライ

行く道は下流老人新ばしり

「下流老人」は、いわば「三流以下の老人」の意でしょうか。そうでしたら上五の「行く道は」の「は」がわからなくなる。「行く道や」と切れていたらまだしも折合いがつけ易いが、そうすると「新ばしり」が解らなくなる。純子さんの中には折りあいがついているのでしょうけど。

〇(まる)9でゴミ袋もらふハローウイン

散文の語順語序でことばを並べるよりも、「ゴミ袋〇(まる)9でもらふ」とした方が詩文に近くなります。

斉藤裕子

祖母坐る苔むす石に黄の小菊
抱き込むやうに蕊包みたるお茶の花
隙間なく一枝に十五土堤の柿
皮ジャンに先の尖んがる男靴

祖母坐る苔むす石に黄の小菊

中七の「石に」と「黄の小菊」をつづけるのは、「石に小菊が咲いている」ようにとられかねない。「苔むす石や黄の小菊」と切りたい。

抱き込むやうに蕊包みたるお茶の花

「抱き込む」も「包む」もおんなじことを言っているわけですからどちらかにしたい。

〈金の蕊包みこむやうお茶の花〉。

隙間なく一枝に十五土堤の柿

「十五」は意味ある個数なんでしょうか。

〈隙間なし一枝に十五ほどの柿〉。

七郎衛門吉保

ダウン着ず蕎麦に温もる氷雨かな
寒の雨長靴欲しと謂う子あり
虎落笛原発事故の黒い雨
中腹にキャタピラ重機雪催ひ

ダウン着ず蕎麦に温もる氷雨かな

ダウンを「着ず」は面白くない。やっぱり着た方がいい。

〈ダウン着て蕎麦に温もる氷雨かな〉

もつとも私なら、「氷雨の候」としたいのですが。

寒の雨長靴欲しと謂ふ子あり

雨に長靴をほしがることが珍しいのなら「謂ふ子あり」で宜しいのですが、そうではないわけですから

〈寒の雨長靴欲しと謂ふ子かな〉

と、言い切った方が。

秋川泉

老猫の大くさめして石蕗日和
湯ざめする夫の小言につき合ひて
湯たんぽを抱きかかへ寝し幼き日
グッナイと暖炉の炎細りたる

湯たんぽを抱きかかへ寝し幼き日

「寝し」は不要か、と。

〈湯たんぽをい抱きかかへし幼き日〉

佐藤喜孝

口中の鵜の骨のほぐれゆく
秋の午后渚におろす尾骶骨
雪嶺に湯気たちのぼる飼葉桶
ゆふぐれを乗せてバス来る枯田中
魂むかへひそかにひとり加へけり

雪嶺に湯気たちのぼる飼葉桶

遠くに雪山、身ぢかに馬の体温。

ゆふぐれを乗せてバス来る枯田中

人とともにバスは夕暮れも下ろして去るのです。

魂むかへひそかにひとり加へけり

虚子に

風が吹ぐ仏来給ふけはひあり

があります。喜孝さんの句と重なる処は「お盆」しかないはずですのに虚子句を思い起すのは、「なつかしさ」が根底にあるからなのでしょう。「なつかしさ」は「いとほしさ」の裏がえしでもあるのです。

満州回想

武井石艸

カラカラと音して凍魚馬車（マーチョ）より
零下二十巷に靴を縫ふ驚異
哈爾浜の女毛皮に裸を包む
氷柱一尺あごに満馬の立ち眠る
防寒の手套のまゝに白酒（パイチュー）を
ペーチカに背を預けたる母の亡し
壕の土焚火に温めなほ堅く
氷花掻き顔拭ひたるわれ囚虜
零下二十脱走夜の無蓋貨車
大陸の凍土に埋めて来し人よ

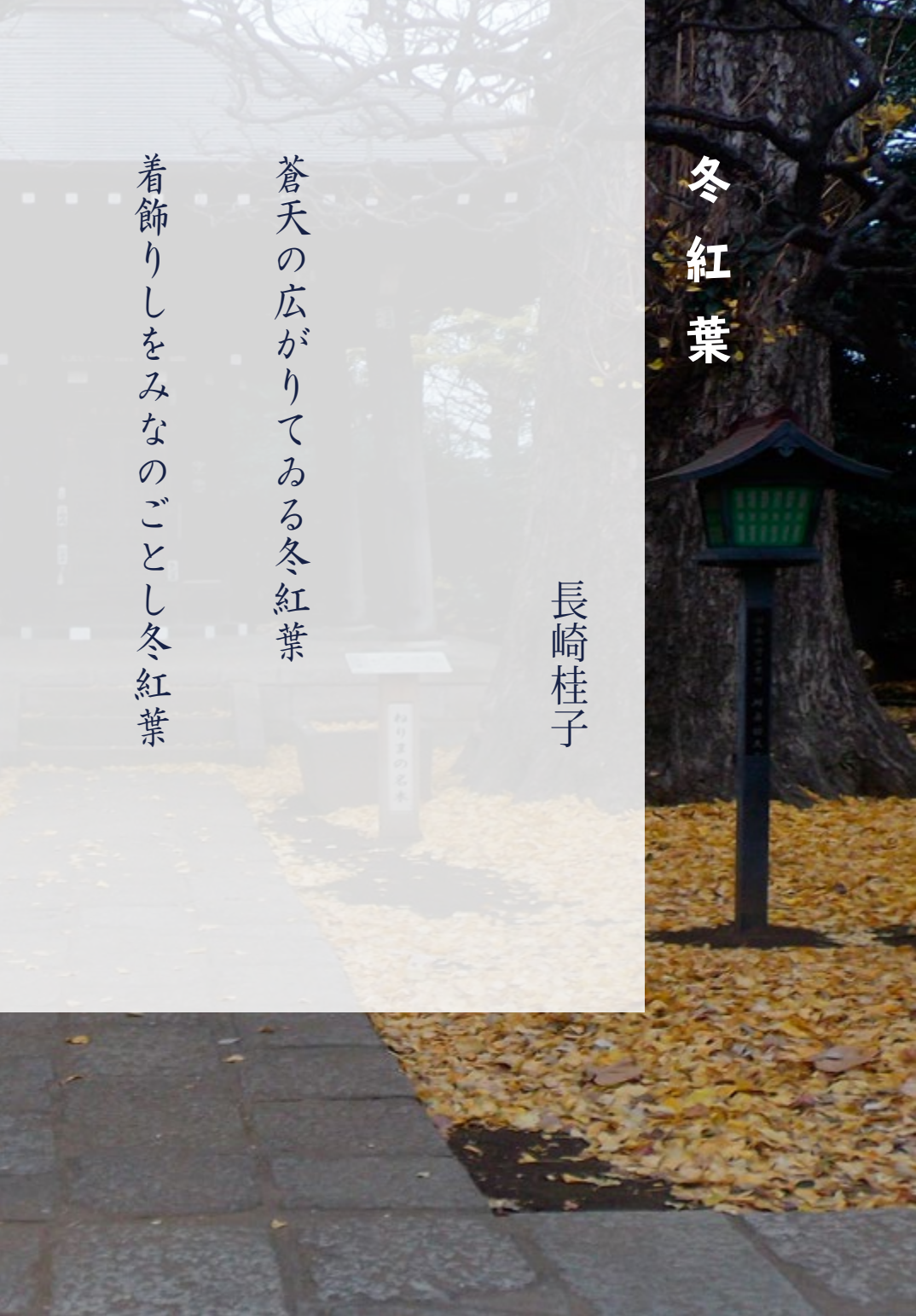
『水音』（昭和廿八年十二月号より転載）

冬紅葉

長崎桂子

蒼天の広がりてゐる冬紅葉

着飾りしをみなのごとし冬紅葉



黒雲に際立ちて揺る冬紅葉

雨風の檄して過ぎる冬紅葉

容色の極みにて散る冬紅葉

冬紅葉幻想かもす夜の帳

時来たり降るごとく冬紅葉かな

あとがき

明けましておめでとうございます。

☆斉藤裕子さんには闘病中のところ一年間作品鑑賞、ありがとうございました。作品と一体になり読みとき、喜怒哀楽を同じくし、わたしの読み届かないところを書いて頂き心強かったです。原稿の追記に「一年間楽しくやらせていただきました。勉強不足と力不足の私に、こんな機会を与えて下さった事に感謝しております。

裕子」とありました。

☆須賀忠男さんの扉の山の絵、ありがとうございました。もう行けなくなった山をしばし誌上で楽しみました。さらなる健脚健筆を祈念致してをります。

（喜孝）

☆御厚志多謝

大山夏子様　長崎桂子様　森　理和様

☆扉絵の木版画はわたしが十代の頃からお世話になった俳誌『水音』の扉絵です。武井石艸画伯のご息女のご厚意で採録させて頂きます。ここには堀内一郎さんも所属されてゐました。

☆赤座吉保さまの俳号が決りました。作品欄に掲載するのがよいのですが、納らないのでここに掲載しました。健吟を期待してゐます。

「我が家は関ヶ原の昔から続いているのですが、セカンドネームとして七郎衛門が代々使われてきました。赤座七郎衛門吉保のように。そこで「あを」では名前表記を、七郎衛門吉保とすることにしました。」

（喜孝）

二〇一六年一月号

発行日　一月十八日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／松村美智子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。